

川口市郎氏ロングインタビュー

第1回：学生時代



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp

協力：浅井歩（京都大学）、山下俊介（北海道大学）、高橋美和

今月から京都大学名誉教授の川口市郎氏へのインタビューを連載いたします。川口氏は1924年生まれで京都帝国大学宇宙物理学教室にて宮本正太郎博士の薫陶を受けました。卒業後、京都大学花山天文台で太陽観測を立ち上げ、日食観測隊に参加するなど戦後日本の天文学の復興に寄与されました。また、花山天文台長として数多くの研究者を育てて太陽研究を推進し、日本天文学会副理事長・理事長を歴任して天文学会の改革に努めるなど、日本の天文学コミュニティに大きな貢献をされています。今回は幼少から大学卒業までのお話です。

川口市郎氏略歴

- 1924年 大阪に生まれる
- 1947年 京都帝国大学理学部 卒業
京都帝国大学理学部 副手
- 1971年 京都大学理学部 教授
- 1979年 京都大学理学部附属天文台 台長
- 1981年 日本天文学会理事長就任
- 1987年 京都大学 退官 名誉教授

●少年時代

高橋：インタビューをお引き受けくださりどうもありがとうございます。ではまず子どもの頃からの話を聞かせてもらっていいでしょうか。お生まれは1924年、大正13年ですね。

川口：そうです。生まれは大阪や。大阪やけどね、2歳か3歳までしかいないねんな。すぐ芦屋へ行ったよ。

高橋：では大阪の頃のご記憶はないですか。

川口：かすかにあんのよね。淀川を蒸気船が走った。それがポッポーちゅうねんな。それが非常に怖かった記憶がある。大正の終わりやで。



写真1 川口市郎氏近影（撮影：浅井歩）。

浅井：淀川の近くやったんですね。

川口：うん、ええとこやで。

高橋：で、芦屋に移って幼稚園ですか。

川口：うん、精道幼稚園やと思ったけどな。体が弱くて僕1年遅れてん。みんなが卒業の記念の植木もらいよんのに、僕だけくれんねん。

高橋: 小さな頃は体が弱くて。

川口: あんまり目立った子ではなくてね、おとなしかったと思いますよ。今でもそうやけど(笑)。その後は順調やけどね。

高橋: 小学校に入って強くなったんですか。

川口: 段々とな。だから小学校の6年になったら体が強くなるとともに成績もよくなっていった思うな。最初の頃は成績悪かって、おふくろによく怒られたん覚えてるわ。2年生ぐらいやったかなあ、しょっちゅうおふくろが横におって叩かれたわ。できひんからね。でも4年生ぐらいになったら、算数は僕のほうがようできた。それからおふくろはやめよった(笑)。

高橋: 勉強は好きだったんですか?

川口: 算数系統は好きやったね。理科系とかな。自然が好きやった。

高橋: 何か特に興味をもったことはありましたか?

川口: やっぱり自然が好きやったな。僕ね、非常に山が好きやねん。だから山に行って。

高橋: 学校が終わってから山に行くって感じですか?

川口: そうそう。日曜日なんか一日おったよ。芦屋のロックガーデンっていうてな、有名な岩があんねん。裏山やねん。それからおふくろにごつつ怒られたんは、朝起きてみたら金魚鉢がイモリで真っ黒けになっとった(笑)。僕が採ってきてん。それでごつつ怒られた。今はあんまおらへんけど昔は池にいっぱいおったんよ。こんなピンにちょっとお味噌入れんねん。それで池につけてくねん。そしたらもう真っ黒けになるほど入ってきたよんねんな。それをもって帰って(笑)。それであれな、嘔みよんねん。迷信があってね、嘔むと毒があって死ぬって噂があんねんな。僕はなんぼでも嘔まれてんねんやで。それでも何にも起こらへん。まあそんな生活してた。やっぱり自然が好きなんやな。

高橋: 芦屋で幼稚園と小学校に行って、中学はどちらですか?

川口: 灘中学。

高橋: 今はすごい進学校ですけど、当時からですか?

川口: うん、かなりよかったけど今ほどでもなかったな。でもそういうときのほうが雰囲気がええのよ。灘は非常に好きやったわ。仲間が良かったわ。

高橋: 中学ぐらいになるとやっぱり勉強が忙しくなるんですか?

川口: うん。そやけど山行とったな。自然が好きで山をほつつき歩いた。試験は特に勉強なんかせえへん。試験が済んでから勉強したな。

高橋: 戦争が始まったのは、中学生の頃でしょうか?

川口: そう、中学の5年。親父はわりと戦争が嫌いなほうでな、「日本はえらいことやりよったぞ、こんなん負けるのに決まってるわ」って言うもった。あのな、大阪人ってね、わりと世界のこと知ってんのよな。世界を相手に商売してるやん。それでな、その頃の軍人やったやつはね、根は非常に真面目なんやな。例えばあの頃、日本の農村が疲弊してね、ちょっとした飢饉になると娘を売らないかんという風なことがあったわけですよ。そういうとき、義憤にかられた人は非常に多かったと思いますよ。だから非常に純粋やねん。そやけど世界を見る目がなかったんやと思うわ。純粋なやつがものを知らんときが一番怖いんですよ。無謀なことすんねん。

高橋: 先生は戦争が始まったときはどういうご印象をお持ちでしたか?

川口: 親父が言うたとおりのや。えらいことやりよったぞって。空襲で日本なんか燃えるんじゃないかっていう気はすぐしたな。ほかに別に印象ないな。あんまり愛国心なかったんかな。だけど甘いものがだんだんなくなってきたのは覚えてる。

浅井: なんか環境とか生活とか変わりましたか?

川口: それはやっぱりあれやな。覚えてるのはね、僕は戦争中に松本高校行ったでしょ? そう

すると松本出身の友だちがたくさんいるわけやな。それが大学に行くわな。東大に行ったやつ多かった。そうすると東京で下宿するわけやな。それから松本高校には東京出身の友だちもたくさんいたわけ。東京から松本高校に来たやつは、大学で東京に帰っていくわけや。そうするとな、松本出身で東京へ行ったやつは死ぬのよ。食料ないねん。でも、東京から松本来て東京へ帰っていったやつは親元やねん。そういうところはやっぱり食料があんねん。だからな、松高から東京へ行ったのはようけ死んでる。かわいそうと思うよ。

浅井: 食糧難でお亡くなり。

川口: うん、食糧難や。そんな悪い時代やってん。栄養が悪いと結核になるでしょ? 今と全然違うわけや。

●旧制松本高校

高橋: 灘中学を卒業後、旧制松本高校に進学されたということですが、そこを選んだのはやっぱり山があったからですか?

川口: 山しかあらへん(笑)。灘から僕1人やったけどな。というのは非常に仲のいい奴が四修で先に松本行きよったんや。そいつも山が好きでな。ほいで「お前が来んとなかなか山行けんやないか、お前来い」とか言われて、しゃあないさかい。僕も山好きやしね。僕の一生、もう山と切り離せませんわ。

高橋: そうなんですか。山が好きで松本高校に来る人は結構多かったみたいですね。

川口: うん。海野(和三郎)君なんかは違うで。

高橋: 海野先生と同級生ですか?

川口: そう。僕の松本高校の友だちでね、非常に頭のええやつが2人おんねん。1人は海野君やねん。もう1人は片山泰久。ものすごい頭良かった。その頃、西田幾太郎、哲学者な、あの「善の研究」という本があんのよ。で、あれ高校のときに出会うのかな。それで皆、何もわからんくせに買うんですよ。それで、買って読んだら何にもわ

からへんねん。そしたら片山がね、あっこれはこうやこうやって、ちゃちゃちゃと解説してくれたん。ものすごく頭脳明晰や。

浅井: 片山さんは京大におられた?

川口: そうそう、京大。片山はね、湯川(秀樹)さんに憧れて京大に来て京大の原子力工学の教授になってん。あれほとんどやったら湯川さんの跡継ぎやと思うわ。ところがね、彼が言うのにね、「わしはピンクや」っちゅうねや。

高橋: ピンクというのは?

川口: アカとちゃうねん。「わしはピンクやからあかんねや」って言うどったわ。京大の湯川さんところはアカが強いですよ。

浅井: そうなりきれない?

川口: なりきれないというか、ピンクってちょっとエッチな方が好きただけでね(笑)。で、わりと京大の物理はアカ系統が強いですよね。教授もそういう人多いんや。

浅井: みなさん同じクラスだったんですか?

川口: いや、海野君は理乙。僕は理甲や。甲乙とあって、甲は主に英語、乙はドイツ語やねん。ドイツ語はね、昔、医学部行くにはドイツ語がいったんや。

高橋: 旧制高校の英語教育はどうだったんですか?

川口: そんなのあかんわ。役に立たんわ。僕が一番最初にアメリカ行ったのは、大学出てすぐぐらのホヤホヤ、日米の共同シンポジウムなんですよ。そいでシンポジウム行ってね、喋ったんやな。喋るのは、全部ピチッと書いていってそのとおり読んでるだけや。でも質問しとるのが何にも分からへん。

高橋: 今でもそんな感じですよ。その松本高校ですが、試験を受けて入るんですよ?

川口: うん、そうそう。それは難しかったね。

高橋: 試験はどんな感じなんですか?

川口: 志願者4~5倍かな。昔ね、旧制高校入ったら京大でも東大でも、国立大学皆ほとんどフ

リーパスで行くんですよ。だけどその高校が難しかったわ。僕はずっと入りましたけどね。

高橋: 灘中からだど、やっぱり三高が多かったのではないですか？

川口: いや、そんなことないよ。旧制高校へ行ったのは1/3とかその程度ちゃうかな。

高橋: あっそうなんですか。そのほかの方は？

川口: 同志社大学とかね、そういうとこ行ってんねん。龍谷だとか、それから早稲田とか慶応とかね。旧制高校行くのはやっぱり一番エリートやったと思いますよ。

高橋: 高校から親元を離れて、寮ですか？

川口: いや、下宿してた。松本は寮が狭かったからね。僕は山が好きやから、寮なんかどうでも良かった(笑)。家に帰るのが嫌なぐらい、生活楽しかった。

高橋: あんまり勉強は厳しくないんですか？

川口: まあ、普通にしとりゃ通るんやな。だけどね、松本の先生は悪かったわ。あの時代、ええ先生は松本みたいな地方へは来んのやわ。それで松本から京大へ来たときは、ほんま格段の違いやと思うた、先生が。特に宮本(正太郎)先生^{*1}は素晴らしいからな。それで一番嫌いやったのは、陸軍やった。

高橋: え、陸軍を嫌ってことですか。それは軍事教練ですか。

川口: うん、軍事教練。あの精神論が嫌いやったわ。よう言われたわ、「お前たちは計算が上手やけど戦争に行ったら役に立たん」とかって言うのよな、教官がな。で、「役に立つのはこれだ」って言って銃剣やるのな。銃剣術な。あんなんやるから日本負けたんやと思うけどね。

高橋: 教練は中学から始まるわけですね。

川口: うん、そうそう。でも灘の教官はわりとよかったわ。その教官さぼりよんねん。あんまりしつけよらへんのよな。ほんで終戦になったらそれ

が事務に入っどんねん(笑)。みんなに慕われたんやろ。さぼったさかい。だけど松本高校はもうわけのわからん知性のない教官が多かったな。非人道的なんよな。んで、道理がないねん。それに反発したわ。

高橋: 高校の頃、得意だった科目とかはありましたか？

川口: そういのは特になかったな。ともかく得意な科目って山登りだろうね。高校時代めっちゃ行ったわ。よう生きてたと思うわ。常念岳ってあるでしょ。松本から行けるんだけど。それで変な沢下りたりね。それから雪があるところ、アルプス登ったりね。雪って怖い。なぜ怖いかというとね、木があってね、全部埋もれてんねん。木の上は雪で埋まってその下は空洞やねん。そこへダツと落ちるねん。そしたら上がられへんねん。そういう経験してるわ。よう生きてたと思うわ。

高橋: とにかく山登りがお好きだったわけですね。高校の先生とはあまり合わなかったと。

川口: そやけど、松本の町は大好きですわ。特に田舎へ行って山に登るとね、田舎のじいさんが「ちょっと昼飯食っていきなさい」ってよう言うてくれたわ、食糧難の時代に。それで「私の息子も東京へ行って困っておる。人が助けてくれたらいいんですけどね。」って言うもったわ。汚い格好してボロボロの服着てね、山ほつつき歩いてると、「飯食っていけ」ってよう言うてくれはった。食糧難ですよ。

高橋: 高校時代は食料がだんだん厳しくなってきた頃ですか。

川口: 乏しくなってきた。特に甘いもん。だけど大都会に比べれば松本ははるかに良かった。だから山にお米、持って行ったよ。今のハイキングっていうたら、お肉だとかさ、缶詰だとかあるけどね、僕ら持って行ったのは、おかずいうたらお味噌だけやで。お味噌とせいぜい納豆。それしかな

*1 宮本正太郎(1912-1992) 京都帝国大学卒、京都大学名誉教授、1958-1975年に花山天文台長を務める。

かったで、納豆あったら上出来やな。お醤油かけて食ってた。時代が違うから。

高橋: 勤労奉仕はありましたか?

川口: あった、あった。勤労奉仕はね、名古屋のそば、3,4カ月かな。鉄砲作る会社へ行った。それで動員されて鉄砲作ってた。

高橋: 鉄砲を組み立てるといことですか?

川口: うーん、部品を作んねんな。それからネジ切ったりね。今でも覚えているけどね、鉄砲作ったらその鉄砲で実際打つんですよ。それでその命中率、調べんねん。例えば銃身が曲がったら当たらんわけや。そういうことをやってた。でも戦争末期になってくるとね、もうそういうのがなくなってしまった。試しもせんとそのまま出しとったわ。ああこれでは日本もあかん、と思うたな。

高橋: それは何年生のときですか?

川口: 終わりの方。だから高校は2年半しか行ってなくて、あと半年は動員やな。

高橋: 動員が終わって卒業なんですかね。

川口: それで京大行ったんだ。

●京都大学宇宙物理学教室

高橋: 高校を出て京大の宇宙物理学教室に進学ですね。京大を選んだというのは、どういう理由ですか?

川口: あかね、やっぱりね、戦争中で東京なんか行けへんやん。食料難でな。家の近くは便利でしょ? 芦屋の家から通えるもん。下宿だったらものすごく食糧難やねん。

浅井: じゃあ通ってらっしゃったんですか?

川口: 通ってた、通ってた。下宿もしたけどね、家に帰れるやん。そうしたら少し詰め込んで帰ってくるとかね。そうせんと病気になるで、あれ。そういう状況やったな。

高橋: さっきおっしゃってましたが、旧制高校に入るとだいたい大学には入れると。

川口: 入れた。どこでも行けた。

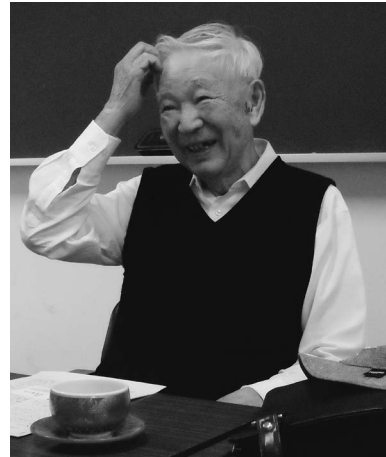


写真2 ユーモアいっぱい語る川口氏(撮影:浅井歩).

高橋: じゃあ旧制高校に入ろうというときには自分は大学に行こうと考えていたと。

川口: うん、そりゃそや。

高橋: 大学に行って、将来どうなりたいというのはあったんですか?

川口: そりゃあの自然が好きなのはもちろん基礎やけどね、でっきるだけ軍隊から遠いところに行こうと思った。天文が一番ね、霞の仙人がいるようなところや(笑)。今でこそ人工衛星とかいろいろあるけどね、その時分ね、星なんか見たって何にも世の中に関係ないような感じやったんやな。科学の進歩とか、僕らのときにはそんななかったな。

高橋: 中学の頃から天文っていうのは考えていたんですか?

川口: 自然は好きやったね。

高橋: 自然の延長で宇宙ということですか?

川口: うん、そうそう。特に天文でなきゃいかんというわけではなかったな。地質でもよかったと思うわ。

高橋: とにかく軍隊から遠ざかりたいと?

川口: うん。それが一番大きな原因ですわ。もうあの軍隊、大嫌いやった。

高橋: 理系は徴兵されずに済むわけですよね?

川口: そうそう. それでね, 文系の仲間が6カ月ぐらい徴兵になったかな. それですぐ戦争が終わって, 食料いっぱい持って帰ってきよった (笑). もう軍隊は解散するでしょ? だから軍隊にあった食料を分けよってん. リュックサックにコーヒいっぱい持って帰ってきよった. うらやましかったのを覚えてる (笑). だから軍隊もええところあったんやな (笑).

高橋: 京大に入ったときにすぐに宇宙物理に配属されるわけですか?

川口: そう.

高橋: 当時はどんな先生がおられたのですか?

川口: 荒木(俊馬)先生が教授で, 宮本先生が助教授. それから上田(穰)先生がおった. 僕はすぐに宮本先生についた.

浅井: 2講座あった時代ですか?

川口: そうそう.

浅井: 上田先生と荒木先生が教授でおられた.

川口: それで喧嘩ばかりしていた.

浅井: よく聞きます (笑).

川口: 講座制の壁って高かったんや. 同じ宇宙物理教室でも二つ図書室があったんやで. それで片っ方の図書室, 行かれへんねん.

高橋: 自分が所属する講座の方しか使えないと. 助教授は宮本先生1人ですか?

川口: 藤波重次さんという先生が上田先生のところの助教授だった. その先生は天文, 知らなかったんちゃうかな. 写真術がうまかった. そいでいつやったかな, 藤波さんと何か話していたら, 「天文なんて簡単なもんや. 写真はもっと難しいんや.」と言われたことがある. そのころ生駒に太陽観測所があってん. 上田先生はそこに力を注いではった. そいで京大を辞めてそこの館長なった.

高橋: 第1講座に荒木教授と宮本助教授, 第2講座に上田教授と藤波助教授ですね. 荒木先生は湯川秀樹や朝永振一郎に量子論を講義したという人ですね.

川口: 僕もちょっとやけど荒木先生の講義を聞いて

ているんや. あの先生有名でな, 「聖夜星を眺むれば」というところから始まるねん. そいでね, 荒木先生はわりと右翼, 右派やったんやね. で, 戦時中はちょっと左翼的なことを言うとすぐに憲兵が来て, 理学部でひどい目におうた先生, ようけいるんやわ. それは別に荒木さんが密告したんじゃないんだけどね. だから, 荒木先生は左翼の先生からずいぶん恨まれたんやわ. そいで定年のちょっと前に辞めてね.

高橋: 具体的にどういう活動をされていたんですか?

川口: 右翼の新聞に書いたりしたんちゃうか. それこそ皇室の一点張りでな.

高橋: 終戦後すぐに退官されてますね.

川口: ところがその後名譽教授の制度ができて, 荒木先生に名譽教授をやりようという話になったんや. あのときは僕が主任やったから僕がやったんやけどね, 相当, 反対あったよ.

高橋: 先生が宇宙物理学教室の主任ということは, だいふ後の話ですか.

川口: うん, それであの荒木先生っていうのは戦争を鼓舞したと. そのせいで若い人が何人死んだのやと言われたことがあるわ. そんな人を名譽教授にしているのかと. でも僕が思ったのは, たとえ右翼であってもね, 僕は名譽教授というものはそういうものとは無関係に厳密に学問的な意味で審査すればいいんだと思うた. 名譽教授の規程があったら大学は規程どおりやらないといかんといいことや. それで僕は覚悟決めたんや.

高橋: どういう規程なんですか?

川口: 一応, なんやかんや書いてあるけど, 要するに教授を何年間務めたかですよ. それで荒木先生はそれに当てはまったんや. ところが荒木先生は右派やからね, 相当, 反対があったわ. たいへんやったで. まあ教授会で否決されたらたいへんやったけど, 反対なかった. あのへん僕の人徳もあつたんちゃうかな (笑).

その名譽教授のとき, 僕, 先生の論文全部読ん

だけど、立派なもんですよ。あの先生、ものすごく語学ができたわ。ドイツ語とね、フランス語でも論文書いていた。しかもね、内容もよかった。あの当時としては、たいしたもんですよ。宮本先生も語学ができたけどね。昔、アインシュタインが日本に来たとき京大にも来たらしいな。そのときドイツ語で挨拶したのは荒木先生や。昔の教授は語学力が強かったな。

高橋: さっき講義の話がされていましたが、上手だったんですか？

川口: 上手やったな。宮本先生が一番上手やけど、荒木さんも上手だった。

高橋: 何の講義を受けたんですか？

川口: 天文総論とかな。宮本先生は天体物理学だったかな、それがものすごくよかってん。寿岳(潤)君なんか本にしようと言っとったくらいや。

高橋: どういう内容だったか覚えていますか？

川口: だからね、物理学の考え方を教えてくれた。天文でもね、例えば planetary nebula って知ってるでしょ。あそこでは emission line が出てくるわけやな。あれが出てくる理由なんかを非常に上手に説明するねん。それで学生みんな感心するんですよ。でも家帰って考えたらどうもわからん(笑)。あんまり上手だからごまかされるねん。

高橋: わかったような気になってしまうと。上田先生も授業をされていたんですか？

川口: 上田先生の授業はね、僕はほとんど出なかったけどね、すごく実用的やったわ。つまりメッキとか、そのころは天文学に鏡のメッキが絶対要るでしょ？ それを全部ノートに書くわけやな。それは非常に役に立ったと僕の友だちは言うとった。そやけどね、メッキの仕方なんか聞いても面白くないやん(笑)。

高橋: そうですね(笑)。

川口: それから望遠鏡のセッティングやとかね、そういう授業だった。だから非常に役に立つねん。そやけど、ちっともおもしろくない。

高橋: 授業はその実験の授業と宮本先生の天体物理と、荒木先生の天文総論と。

川口: それから宮本先生でもものすごく感心しているのはね、誤差論計算法という授業があるんですよ。本も書いていたかな。宮本先生が京大の工学部行ってね、その授業をやる面白いですよ。そやから工学部の学生、いっぱい詰めかけて。それで後になって宮本先生から「次、お前やれ」と言われて、僕がやらされて。あんなもの、最小2乗法とかね、おもしろうにできんわね。あんな授業、面白くできるか？ それがね、先生やと面白いねん。

高橋: 人気の授業だったわけですね。

川口: そうやねん。たいしたもんですよ。言うけども、それはあの先生、30代前半やな。

高橋: そんなに若かったんですか。物理の授業もあつたんですよ？

川口: 物理の授業は物理の先生やけどね。けど、僕は物理学的な考え方を教わったのは宮本先生だと思いますよ。

高橋: 物理の授業はどんな先生がされていたんですか？

川口: 湯川さん。湯川さんてね、個人的にちょっと話をしたことがあるんだけどね、ものすごく学識があるんですよ。そりゃもう感心するぐらい。せやけど授業は下手くそや(笑)。量子力学の授業。眠そうに眠そうにやりはるねん。いやいややってはったわ。せやけど宮本先生の授業は完全にだまされて、麻醉にかかったようなもんやね。

浅井: その頃、宇宙物理に林忠四郎さんがいらっしやったとか。

川口: 湯川さんがうちの兼任の教授やってん。それで湯川さんが林先生をうちへ寄越しはって。で、当時の木造の建物やけどね、その一部屋もろて勉強ばかりしてたわ。だけど宇宙物理とはかわりはない。部屋作ってはただけや。

高橋: 京大宇物の同級生には、どういう方がい

らっしゃったんですか？

川口：同級生はね、僕のとときは8人おった。多かつてん。ここの助教授だった服部(昭)もそうやな。

浅井：一日の生活って、どんな風だったんですか？ 花山天文台にも時々あがってこられて？

川口：花山？ それはあかんね。今の若い人らは知らんだろうけど、昔は講座の壁で僕ら、花山に來れなかった。もし来たいのやったら講座変わってくれと言われたわ。

浅井：へー。

川口：それで上田先生が辞めてから来るようになった。それまで来たらいかんねん。

高橋：当時、花山天文台は第2講座の上田先生が管理していたということですか。

川口：そうそう。で、上田さんがやめてから僕は花山に來て太陽の観測をやり始めた。その弟子が育っどんねん。

高橋：学生はみんなどちらかの講座に所属するんですか？

川口：そうです。

高橋：荒木先生の第1講座か上田先生の第2講座ということですね。

川口：そうそうそう。ただ、僕は宮本先生やね、荒木先生、すぐ辞めたからね。第1講座やから第2講座の本も借りられなかったよ。

浅井：図書室も別だったんですね。

川口：そうやね。そんな時代だったわ。

浅井：荒木先生が出られて、宮本先生が教授になって。

高橋：その壁を宮本先生も引き継がれたわけですか？

川口：うん。それを全部、潰したのが僕ですわ。僕とね、小暮(智一)さんと加藤正二さんと。ものすごい仲が良かった。僕は宇物の主任やで。ずうっと主任やった。

高橋：元々あった壁というのはどういうものなんですか？

川口：あのねえ、荒木さんとか宮本さんとかね、ス

ケール大きくて偉いんですよ。僕らはほんまの小粒やねん。小粒やから集まるんですよ(笑)。僕はそういうことを言うのは嫌だから言わないけどね、昔の京都新聞にいっぱい出てるわ。知ってる？

山下：はい。連載されてみんな楽しんだという話を聞きました。

浅井：新聞記事になるっていうことは、要はみんな知っているみたいな感じなんですね。

川口：僕かてそういうのは嫌やった。僕が教授になってから、そういうことはなくなったんやで。もっともそんなことをしている暇なかった。学生と紛争があったからね(笑)。そんな教授同士が喧嘩したら何にもならへんやん。それこそ学生としょっしゅう団交やったからね。だから、そんなことしている暇はないわな。

●終戦と卒業研究

高橋：では話を戻しますが、卒業研究も宮本先生のところでされたということですか？

川口：宮本先生。そうそう。戦争負けたときにね、なっかなか大学の授業、始まらなかったから本で勉強していた。エディントンの内部構造論ですよ。あれ300頁ぐらいあるやろ、結構長かったな。あれをもう繰り返し繰り返し読んだわ。11月か12月ごろまで休みやったで。

高橋：3年生で研究はするんですか？

川口：あんましなかったなあ。せいぜい論文読む程度やろうな。だって観測装置も何もあらへんのやから。今の人が考えられんほど貧乏やった。

高橋：エディントンの本を読んで、それでその後の方向性が決まったんですか？

川口：エディントンと太陽、あんまり関係ないと思うけど。天体物理の考え方を学んだのは確かや。

高橋：終戦のときは何をしていたんですか？

川口：ものすごい暑い日やったことを覚えてるわ。8月15日な。暑かった。ラジオ聞いても何もわからへん。録音が悪かった。うみゃうみゃ言う

て、何となしに負けたんやということがわかったと思うわ。

高橋: そのときはどう思いましたか?

川口: いや、助かったと思った。軍隊、大嫌いやったから。あまり悔しいという気はなかったな。そのとき面白いねん。学生やったでしょ、これからどうしようかと考えてね。荒木先生のウチ訪ねて「どうしましょう」言うて、それから宮本先生も訪ねて。そしたらね、全然答えが真反対やったわ。荒木先生はね、「もうこれで日本はつぶれるから、教室にある本、どんな本でもいいから持って帰りなさい」ちゅうて。宮本先生は、「これから日本はようなりますよ、砂糖も入ってきますよ」って反対やったわ(笑)。実際はそのちょうど中間やったけどな。荒木先生は非常に悲観的やった。

そいでな、考えてみたらな、その頃、宇宙物理にあった本や論文はね、第一次世界大戦でかなりドイツから持って来よったん。

高橋: 本をですか?

川口: 本を。その本がたくさんあったんや。

高橋: 第一次大戦の戦利品としてということですか?

川口: 戦利品として。そんな聞いた。考えられへんやろ? 荒木先生はそれを連想しなはったんやと思うねん。アメリカに本を取られると思うたんやろうな。でも天文学のアホみたいな本、アメリカが取っていくはずがないな、今から考えれば。

高橋: 京都でも空襲はあったんですか?

川口: ある。2回ある。僕も厳粛に覚えていますわ。ドーンというてね、昼をひっくり返したような音やったわ。それは馬町と西陣、2回落ちとる。

高橋: 被害は大きかったんですか?

川口: そんな大きくはない。爆弾が邪魔になったから落としたり。その程度だと思ふよ。本格的なあれじゃないと思ふますよ。

高橋: ご実家の芦屋のほうはどうだったんですか?

川口: 芦屋はさんざんやられた。アメリカで悪いですよ。まず浜のほう爆撃して、山のすぐそばもやりおるねん。それでどっちも逃げられんようにして、真ん中に爆弾落とすねん。

高橋: ご実家にも被害があったんですか?

川口: 僕のウチもやられたですよ。防空壕があつてね、オヤジとおふくろはそこへ入ったから助かったけど。

高橋: その頃先生は京都にいたんですか?

川口: 京都にいた。けが人はなかったけどね、アメリカで悪いですよ。

高橋: じゃあアメリカには良くない印象を持てますか?

川口: それは持っていないな。

高橋: あ、そうですか。そういう教育は受けなかったんですか?

川口: 僕の頃はまだ戦争より早かったからね。あんまり軍国主義じゃない。戦争、負けそうになっているときに中学校とかでね、「志願兵行けー」ってしばいたらしいな。特攻隊ではないけど志願兵な。それはなかった、僕のときは。

それで、大学でも軍事教練があつてね。近くに瓜生山という山があるねん。その教官が瓜生山に連れていってね、「市街戦になった場合、ここがお前たちの死に場所や」って。「そこに立て籠もって抵抗せい」っちゅうわけや、市街戦になったとき。小さい山や。あんなどこで市街戦も何もあらへんわ。大砲の弾が三つ、四つ落っこつたら全部なくなってしまう、そんなどこや。

●第1回日本天文学会

川口: あ〜、それでな、これもびっくりする話であげようか。たぶんね、僕が大学出てしばらくたって、一番最初の学会が京都であつたんや*2。

*2 第1回年会第2部1948年5月21・22日。

そのとき先生に言われたのが、学会っちゅうのはどうでもいいっちゅうねん。一番大事なのは懇親会だと言うんだ。ところが当時、酒がないねん。でもそのときまたまね、1人1升、酒の配給があったんや。昔、ちょいちょいそういうことあったよ。煙草も配給があったんやわ。ほいでね、僕、煙草吸わへんのに来るねん。そいでオヤジに持って帰んねんけど、そのうち自分がそれを吸うようになったわ(笑)。そんな時代だったわ。

高橋: そういう配給は一律にくるんですね。

川口: そいでな、1人1升酒が配給になったんや。コメがないからご飯の代わりやと思うのやけどね。そのとき先生がね、宮本先生か荒木先生か忘れたけど、**「学生は酒を飲んだらいかん」**ちゅうねんな。**「それを懇親会に出せ」**ちゅうねん。そんなとき学生が8人おったけど、4本しかあらへんのや(笑)。服部なんか飲み助はそんなことできへんねん。すぐ飲んでまいよんな。僕は真面目に出したん。そいで服部は悪いと思うたのかな、どっかでドブコク買ってきてね。密造酒や。それをよう買いに行ったわ。買いに行って日本天文学会のお偉方に酒サービスしたわ。今の学生、そんな苦労ないやろ。

浅井: ないでしょうね。

川口: 君ら知らんかな、当時の木造の建物に講義室が一つあるねん、メインの講義室。それが50人ぐらい入んのや。そこで天文学会してた。ちっちゃいちっちゃいねん。それが第1回。もちろん僕は喋らへんです。研究していないからね。前に座って時間見てチンとやるあの役やって、あれがうれしくてしゃあなかった(笑)。偉い先生が喋っていても僕のチンでやめおる(笑)。

高橋: 東京とかからも先生がいらっしゃったんですか？

川口: そうそう。東京とか東北も。東北は松隈(健彦)さんという先生で誰かと論争したの覚え

ているけどね^{*3}。そのときは大満足して帰ってもらったと思いますよ。酒が出たんや。しかもたらふく飲んだと思いますよ。あんな愉快なことはなかったぐらい言ってた。そのころの学会と今の学会と全然ちゃうねん。非常にこぢんまりしとったんや。50人でできるんやで。今それこそ何百人でしょ。意思疎通なんかないわな。その頃小さいからね、それで余計に懇親会が大事なるんよな。

高橋: みんなお互いに顔を知っているみたいなの。

川口: そうそう。そんなんやった。そやけどこっちはお酒出したんやで(笑)。先生ものんきやな。おコメの代わりになるやつを飲んだらいかんちゅうんだよね(笑)。

高橋: 何日ぐらいやってたんですか、当時の学会は？

川口: 1日か2日じゃなかったかな。ちょっとですよ。講義室だから50人ぐらいですわ。それで後の話やけど、僕は学会で理事長してんのよな。そいでそのときぐらいからですよ、学会でパラレルセッション、あれが問題になったんや。でも偉い先生が全部聞かないかんと言って頑張りおったんや。一つにせいちゅうねん。そのときに確か、それを押し切ったと思いますよ。最初二つか三つだったけど、今はいくつぐらい？

浅井: 今、いくつだろう。6個か7個。そういうことになっています。

川口: せやろ。僕が理事長のとき二つにしたと思うで。

高橋: では当時は一つで、こぢんまりとやっていたと。

川口: うん、こぢんまりしている。講義室やもので、その頃、東大が変な離れたとこにあったんやな。東京はその頃クシャクシャやったんや。終戦直後やで。そいで海野くんとか東京の人がね、京都の木造の建物のことを御殿、御殿と言ったわ。こぢんまりした一戸建てで、そこ天文だけ

*3 「近接食連星における反射効果について」という題名で講演している。

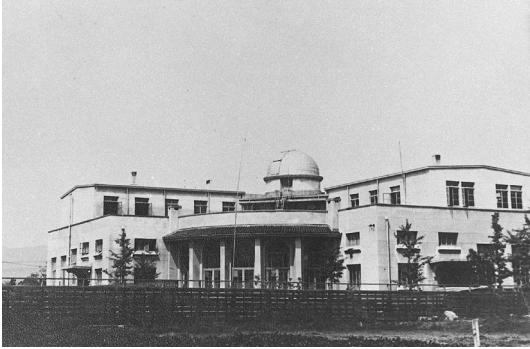


写真3 京都大学北部構内にあった宇宙物理学教室二代目建物（京大宇宙会提供）。

やってん。そういう時代やったから、宇宙物理教室がまとまって一つの建物にいるということは非常に珍しかったんや。羨ましがられたわ。

高橋：東京のほうは戦争中、疎開していましたね。

川口：そうかそうか、疎開してた。あれ、諏訪の方やな。

高橋：そうですね。京都はそんなことはなかったですか。

川口：京都はなかった。

浅井：宇宙物理教室の建物は今の場所じゃなかったんですか？

川口：今の場所や。今の場所やけど、新しい大き

な建物の4階と5階やろ。あれ、4階と5階を教室にしたのを僕がやったんよ。地球物理におった先生がね、「天文は天に近いから天に行け」って(笑)。それで上がった(笑)。

(第2回に続く)

謝辞：本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

A Long Interview with Prof. Ichiro Kawaguchi [1]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: This is the first article of the series of a long interview with Prof. Ichiro Kawaguchi, a former president of the Astronomical Society of Japan. After the graduation from Kyoto University, he started observation of the Sun at Kwasan Observatory and contributed to the recovery of postwar Japanese astronomy. In this article, he talks about his childhood and Kyoto University during and after the World War II.